

ヘブル人への手紙8章「新しい契約」

1A さらにすぐれた務め 1-6

1B 天における聖所 1-2

1C 着座 1

2C 主が設けられた幕屋 2

2B 天にあるものの写しと影 3-5

1C ささげ物 3

2C モーセの幕屋 4-5

3B すぐれた約束と契約の仲介者 6

2A 古い契約に代わるもの 7-13

1B 欠け 7-9

1C 来るべき日 7-8

2C 不従順による罰 9

2B さらにすぐれた約束 10-13

1C 心にある律法 10

2C 神の知識 11

3C 不義へのあわれみ 12

4C 新しさ 13

本文

ヘブル人への手紙8章を開いてください。イエス様の大祭司の務めについて、私たちは本格的な議論に入ってきました。詩篇 110 篇の有名なメシヤ詩篇、キリストが神の右の座に着かれるという約束のところで、ダビデはこの方は、とこしえに、メルキゼデクの位に等しい祭司であると預言しました。地上の祭司の務めでは全うできなかった救いを、イエス・キリストは完全に救うことができると言いました。「したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。(7:25)」地上の祭司の務めよりも、はるかにすぐれた務めです。そして、毎日いけにえを捧げるのではなく、「キリストは自分自身をささげ、ただ一度でこのことを成し遂げられた。(27 節)」のであり、この方は「永遠に全うされた御子」であるのです(28 節)。

そして、天におられる大祭司なるイエス様の働きは、10 章 18 節まで話が続き、そこでクライマックスを迎えます。そして、だからこそこの方によって大胆に神に近づくことができると言えるのです。そして、ここ 8 章では、その大祭司の務めの中で「契約」について論じていきます。神との契約が、従来のモーセを仲介とした契約が古くなり、キリストを仲介として新しい契約が始まったことを論じます。

1A さらにすぐれた務め 1-6

1B 天における聖所 1-2

1C 着座 1

1 以上述べたことの要点はこうです。すなわち、私たちの大祭司は天におられる大能者の御座の右に着座された方であり、2 人間が設けたのではなくて、主が設けられた真実の幕屋である聖所で仕えておられる方です。

一語一語が、力強い言葉です。私たちの大祭司、すなわち、主イエス・キリストは、第一に「天」におられます。天について、私たちは軽視しがちです。聖書が語っている、神が王として玉座についておられる天は、この天地万物が滅び去ろうともなお残っている御座です。私たちは、この御座の確かさをすでに読みました。「主よ。あなたは、初めに地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。これらのものは滅びます。しかし、あなたはいつまでもながらえられます。すべてのものは着物のように古びます。あなたはこれらを、外套のように巻かれます。これらを、着物のように取り替えられます。しかし、あなたは変わることがなく、あなたの年は尽きることがありません。(1:10-12)」詩篇 115 篇には、異教徒がイスラエルの民を見下して、「彼らの神は、いったいどこにいるのか。」と聞いているのに対して、神の民が、「私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行われる。」と答えました(2-3 節)。天は、私たちが心の中で想像している産物ではなく、むしろ私たちが肉眼で確かだと思っているこの天地を力強く動かし、望むままに動かしておられる神の玉座があるところです。

2C 主が設けられた幕屋 2

そして、新しい話題が始まります。イエスが天における大祭司であるなら、その大祭司が仕える聖所も、地上ではなく天にあるということであり、主が「人が設けられたのではない」とありますが、これはモーセに神が命じられた幕屋について話しています。主がモーセに対して命令して、わたしの住む幕屋を造れと命じられました。主が命じられたということであれば、もちろん主が設けられたのですが、それはモーセという人によって設けられた幕屋です。出エジプト記 25 章から、幕屋の中における器具、あるいは祭具を造ることを命じておられます。祭具や板、幕などを作るのは、もちろん人間です。主は、知恵のある者にご自分に霊を満たし、彼らがそれらの祭具や幕などの細工をしました。しかし、天においては、そのような人の介在なしの、主ご自身が設けられた聖所があるのです。

2B 天にあるものの写しと影 3-5

1C ささげ物 3

3 すべて、大祭司は、ささげ物といけにえとをささげるために立てられます。したがって、この大祭司も何かささげる物を持っていなければなりません。

大祭司は、罪のためのいけにえ、全焼のいけにえ、和解のいけにえ、穀物のささげものなど、いけにえやささげものを主の前に携えるために立てられています。同じように、天におられる大祭司もいけにえを捧げました。そのいけにえとは、ご自身の命であり、その流された血です。

2C モーセの幕屋 4-5

4 もしキリストが地上におられるのであったら、決して祭司とはなれないでしょう。律法に従ってささげ物をする人たちがいるからです。

この手紙が書かれている時、まだエルサレムには神殿があったことを思い出してください。紀元七十年のときに、ローマによってエルサレムが破壊されましたが、その前にこの手紙が書かれています。したがって、アロンの位の祭司が律法に従ってささげ物をしていました。イエス様が地上におられても、彼はユダ族ですから、この祭司の務めに携わることはできません。

5 その人たちは、天にあるものの写しと影とに仕えているのであって、それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。神はこう言われたのです。「よく注意しなさい。山であなたに示された型に従って、すべてのものを作りなさい。」

地上の幕屋は、「天にあるものの写しと影」です。出エジプト記 25 章以降には、祭具や幕や板の設計が、細部に至るまで主によって指示されています。その寸法、形状、材料、色など、事細かな指示があり、主はモーセに、「示された型に従って、すべてものを作りなさい。」と命じられました。なぜそこまで詳しく定められ、かつ聖書の中に幕屋のことが多くの紙面を割いて説明されているのは、それが天におけるものの写しと影だからです。天において聖所があります。その聖所は、地上の幕屋によって写し出されていたのです。

黙示録8章を開いてください。黙示録は6章から、神が終わりの時に下す災いについて描かれています。8章では第七の封印が解かれました。そして、こう書いてあります。「また、もうひとりの御使いが出て来て、金の香炉を持って祭壇のところに立った。彼にたくさんの香が与えられた。すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。それから、御使いは、その香炉を取り、祭壇の火でそれを満たしてから、地に投げつけた。すると、雷鳴と声といわずと地震が起こった。(8:3-5)」天にある神の御座には、金の祭壇がありました。そこは香が、煙が立ち昇るところです。その火を御使いが地に投げつけると、災いが起こりました。モーセに示された幕屋には、聖所があります。聖所は垂れ幕によって二つの空間に仕切られており、大きい方が聖所、小さい立方体の空間が至聖所です。聖所に入ると、右手には十二個のパンが供えられている机があります。左手には、七つの枝がある燭台があります。そして正面に、垂れ幕に面して香壇があります。天にあるものの写しが、地上の幕屋だったのです。

そう考えると、私たちには、天とはどのような所であるか、どのような存在であるかを、明瞭に知ることができることを知ります。私たちが、天国とはどのようなところかを、自分の頭で考えて想像する必要はないのです。聖書がすでに、天とはどのような所かを啓示しているからです。

私たちは、絶えず地上のものを思わず、天のものを思うように促されています。それは、福音を初めに信じる時だけで終わるのではなく、むしろ天あるものが実体なのに、地上にあるものによって天のことを思おうとする過ちを犯します。ヨハネによる福音書は、他の福音書以上に、神から来た方、天に上げられた方としてのイエス様を教えています。ユダヤ人とイエス様との会話に、絶えずズレがありました。例えばヨハネ 6 章 31-35 節を読みます。「私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。『彼は彼らに天からパンを与えて食べさせた。』と書いてあるとおりです。」イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。モーセはあなたがたに天からのパンを与えたではありません。しかし、わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります。というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。」そこで彼らはイエスに言った。「主よ。いつもそのパンを私たちにお与えください。」イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」

その群衆の考えていた「天」は、物理的な天でありました。けれどもイエス様は、第三の天、神の御座のある天を話しておられます。同じ「天」という言葉を使っても、ズレが生じているのです。パウロはこれを、覆いが掛けられていると話しています。「しかし、イスラエルの人々の思いは鈍くなったのです。というのは、今日に至るまで、古い契約が朗読されるときに、同じおおいが掛けられたままで、取りのけられてはいません。なぜなら、それはキリストによって取り除かれるものだからです。(2コリント人 3:14)」

キリスト者は絶えず、自分は天から生まれた者であり、天に属しているという不断の努力を信仰によって保たないといけません。キリスト者でさえ、この世においていかに生きていくべきかというテクニックを求めていきます。そうではなく、天がどのような存在か、そして天の御座にキリストが着座されていることを見つめる時をもっとつくる必要があるのです。そこが私たちの故郷であり、自分の存在意識の置き所であり、いのちの源だからです。

3B すぐれた約束と契約の仲介者 6

6 しかし今、キリストはさらにすぐれた務めを得られました。それは彼が、さらにすぐれた約束に基づいて制定された、さらにすぐれた契約の仲介者であるからです。

「しかし今」という言葉が出てきたら、そこが大きな対比になっています。そして、「さらにすぐれた」という言葉が三回も出てきます。「さらに優れた」と言っているのですから、アロン系の祭司の務め、律法における約束、そして古い契約が悪いのではないのです。私たちは今、日曜は旧約聖書を通読しています。そこにある、主の慈しみ、イスラエルの民への関わりは、極めて優れており、その礼拝と奉仕はとてつもなく栄光に富んだものです。しかし、その輝きでさえが、実は来るべき実体の前置きでしかなく、今やその実体が現れたのです。

2A 古い契約に代わるもの 7-13

1B 欠け 7-9

1C 来るべき日 7-8

7 もしあの初めの契約が欠けのないものであったなら、後のものが必要になる余地はなかったでしょう。

「あの初めの契約」とは、モーセをとおして神がイスラエルと結ばれた契約です。そして「後のもの」とは、これから引用される、エレミヤが預言する新しい契約のことです。イエス様は、この新しい契約の仲介者として、これまで述べてきた天における大祭司の務めを行われます。

これはイスラエル国、厳密には南ユダ国がバビロンによって滅ぼされて、イスラエル人が捕囚の民となることを預言したエレミヤを通して、与えられた約束です。エレミヤが生きていたときは、イスラエルは神に対して背信の罪を犯し、もう取り返しがつかないほど墮落していました。モーセはかつて、シナイ山の上で、またヨルダン川の東岸で、主が与えられた律法に聞き従わないならば、これこれの呪いが来るという預言をしていました。まさにモーセが預言したとおりの呪いが、イスラエルにもたらされようとしていました。エレミヤは、モーセが預言した、引き抜かれて、散らされて、根絶やしにされることが目の前に迫っているという預言が間もなく実現することを知っていました。けれども主はエレミヤに、「わたしは引き抜いて、また植える。」とお語りになっていました(エレミヤ 1:10)。イスラエルは、モーセを通して与えられた契約にしたがって引き抜かれるけれども、主が一方的に新しい契約をお立てになり、その契約によって彼らを回復させるということです。モーセを通して与えられた契約は、イスラエルが従順であることが必要条件でしたが、エレミヤを通して約束されたことは、主が一方的に行なわれる無条件の契約です。「あなたがたが聞き従えば、わたしは祝福する。」ではなく、「わたしは、これこれのことをする。」という約束です。

そしてイエス様は、このエレミヤを通して与えられた約束に基づいて、十字架につけられる前夜、過越の食事を弟子たちとともに取られている中で、こう言われました。「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。(ルカ 22:20)」契約には印が必要です。神がノアと契約を結ばれたとき、その印は「虹」でした。アブラハムと契約を結ばれたときは、「割礼」がその印でした。モーセとの契約は、「安息日」が印でした。ダビデと契約を結ばれたとき、それは「処女から生まれる男子」が印でした。そして新しい契約は、主がお語りになったように、「血」が印です。イエス様は、新しい契約をご自分が流される血によって結ばれました。そしてこの契約に基づいて、主は大祭司として父なる神に仕えておられます。したがってイエス様は、さらにすぐれた契約の仲介者となっておられます。

8 しかし、神は、それに欠けがあるとして、こう言われたのです。「主が、言われる。見よ。日が来る。わたしが、イスラエルの家やユダの家と新しい契約を結ぶ日が。

ここの「それに欠けがある」と訳されていますが、実は「それに」ではなく「彼らに」と訳したほうが適切です。複数になっています。新共同訳では、「イスラエルの人々を非難して」となっています。モーセの

契約が欠けているのではなく、エレミヤの預言にあるように、それを守り行えなかったイスラエルの民に欠けがあるので。「ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。(ローマ 7:12)」と使徒パウロは言いました。律法自体が問題ではありません。しかし、続けて彼はこう言っています。「では、この良いものが、私に死をもたらしたのでしょうか。絶対にそんなことはありません。それはむしろ、罪なのです。罪は、この良いもので私に死をもたらすことによって、罪として明らかにされ、戒めによって、極度に罪深いものとなりました。(7:13)」この同じことが、イスラエルの歴史でも起こり、あのバビロン捕囚直前の状態に陥ったのです。

エレミヤが生きていた時代には新しい契約が与えられませんが、いつか、主が定められた時に与えられます。ここに、「わたしが」という主語があることに注目してください。この後の節を読めばお気づきになるでしょうが、「わたしは」「わたしが」と、主が一方向的に新しい契約を結ばせてくださいます。これが、モーセがイスラエルの民に語られた、「あなたがたが主の教えに聞き従うならば、あなたがたは室の民となる。」という約束と決定的に違う部分です。

神は、人が持っている罪の問題をどのように処理されるか、その取り扱いをいろいろ考えておられました。罪を犯す魂は死ぬのですが、人は何度も何度も失敗して、主が与えておられる、罪の赦しの備えをみすみすみ逃してきた歴史を辿ってきました。しかし主は、終わりの日に、罪を犯したものを罰しなければいけないという定めを、ご自分のうちで実現されました。つまり、ご自分のひとり子が、人々の代わりに罪の罰を受けられることによって、もはや人々には罪に対して罰をもって報いない、という取り決めをご自身のうちで定められたのです。

ですから、この問題は私たちの問題というよりも、神ご自身が持つておられた問題なのです。罪に対してご自分の怒りを下しても、人はご自分のところに帰ってくることはない。ならば、罪をもって罰することをご自分のうちで行なわれて、人に対してはただ、赦しと憐れみだけを与えよう、という決断です。主が昔、洪水のさばきを行なわれた後、ノアがささげたいけにえのかおりをかがれ、こう言われました。「わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことはすまい。人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。(創世記 8:21)」のろうことはしないのは、人が正しいからではなく、むしろ初めから悪だから、もう呪うことはすまいと決められました。同じように、主は最終的に、人の罪に対する問題の対処を、赦しと憐れみを提供することによって、解決することにお決めになったのです。

2C 不従順による罰 9

9 それは、わたしが彼らの先祖たちの手を引いて、彼らをエジプトの地から導き出した日に彼らと結んだ契約のようなものではない。彼らがわたしの契約を守り通さないで、わたしも、彼らを顧みなかったと、主は言われる。

主は、イスラエルの民が契約を守り通せないのを見ました。そしてご自分の約束通りに、彼らが守らないのでご自身も顧みないことを、バビロン捕囚で実現されました。その上で新しい契約を結ばれま

す。したがって新しい契約の便益を受ける人は、律法に対して死んでいることが必要です。」つまり、自分に対しては死んでいることです。自分は罪を犯した、そして自分は律法によって死に定められていることを知っている人です。自分にはまだ良いところがあって、それによって生きることができると思っている人は、真の意味で新しい契約を受け取ることができません。新しい契約ではなく、旧い契約の中で生きようとしているからです。

2B さらにすぐれた約束 10-13

1C 心にある律法 10

10 それらの日の後、わたしが、イスラエルの家と結ぶ契約は、これであると、主が言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつける。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

これが、新しい契約の大きな特徴です。「神の律法が私たちの思いと心に書きつけられる」ことです。モーセが神の律法をイスラエルの民に語ったとき、その教えは大きな石に書きしるして、それをエバル山に立てなさい、と命じました(申命記 27 章)。神の戒めは石の上に書かれて、また十戒は石の板の上に刻まれていました。この書かれた神のみことばを行ないによって守ろうというのが旧約なのです。しかし、問題は私たちの内にある罪です。その罪が、私たちが神の律法を守れなくさせています。律法を見ればそれだけ、自分の罪深さが明らかになり、自分が死に値する者であることしか示されません。けれども、律法は私たちにそれを守る力を与えないのです。

そこで新しい契約があります。新しい契約では、まず私たちの罪が、キリストの血によって取り除かれます。完全に心から、良心から罪のきよめが行なわれます。そして御霊が注がれます。エレミヤ書には預言されていませんが、同じ新しい契約をエゼキエルが、御霊が注がれる働きとして預言しました。「わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。(36:25-27)」キリストに信じ、キリストに自分の身を寄せる者には、神は新しい霊を注いでくださいます。私たちの内から変えてくださるのです。新しい性質を神が与えてくださいます。したがって、外側の行いで変えようとしても、内側が変わっていないから守ることのできなかつた神の命令を、内側が変えられたので守ることができるのです。

したがって、新しい契約においては神の命令を守る、という意味が変わります。イエス様が言われました。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。(ヨハネ 14:15)」私たちの関係が、もはや「この掟を守って、それによって神に正しいと認められる。」というものではなくなりました。行ないによって報酬を得るというものではなくなりました。そうではなく、神がキリストによって愛を示されたことによって、その愛の中に留まり、その愛の関係の中でキリストの命令

を守りたいと願います。その命令への順守は、神を愛したいから行うものであり、自分が神に対して認められるためのものではありません。

しばしば、神の恵みと憐れみの話をすると、「それでは、私は神の命令を守らなくてよいのだ。」と安心する人がいます。その人に尋ねたいのは、「ということは、それだけの関係でしかなかったのですね。」なのです。ただ掟を守るか守らないか、の関係です。その掟の背後にある、神の愛の動機については考えません。主を深く愛しているなら、そしてその愛は主ご自身が初めに示してくださったものに基づきますが、主を深く愛しているなら、その命令に服従したいと願うのです。

神の律法が自分のうちに書き記された結果、神が自分の神となり、自分たちは神の民となります。個人的、人格的な関係を持つことができる、ということです。「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。(ローマ 8:15)」律法に従っている時、死罪に定められるという恐怖をもたらす霊ではなく、「アバ、父」と呼ぶ霊を受けました。そして、ヘブル書 12 章で議論される、私たちの行き着く所、新しいエルサレム(12:22)でも、黙示録 21 章では「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、(また彼らの神となり) (3 節)」とあります。

私たちが信仰の悩み、神と自分との関係の中での悩みを聞いていると、ほとんどすべてにおいて、キリストにある父と子の関係を忘れているところに由来しています。あたかも、神が学校の先生のように、あるいは会社の上司であるかのように、あるいは自分の彼氏であるかのように考えています。問題は自分が要求されていることが行えないのではなく、自分が愛されている神の子供だということを忘れてしまっているところに抛ります。

2C 神の知識 11

11 また彼らが、おのおのその町の者に、また、おのおのその兄弟に教えて、『主を知れ。』と言うことは決してない。小さい者から大きい者に至るまで、彼らはみな、わたしを知るようになるからである。

旧約時代には、神の御霊がある特定の人々に外側から働きかけていましたが、新約においては、神ご自身が御霊によって、私たちの内に入ってきてくださったのです。したがって、神のみことばが語られるときに、それを教えるのは、聖書教師でもなく牧師でもなく、聖霊ご自身なのです。ヨハネは、「あなたがたのばあいは、キリストから受けた注ぎの油があなたがたのうちにとどまっています。それで、だれからも教える必要がありません。(1ヨハネ 2:27)」と言いました。注ぎの油、すなわち聖霊が私たちのうちに留まっておられて、聖霊が私たちの霊に語りかけて、そこで神との関係が確立されます。

そして「小さな者から大きい者に至るまで」とありますね。すべての人に御霊が注がれます。ですから、

だれかが大先生であり、知識の足りない平信徒は先生の言うことに従っていればよろしい、ではないのです！すべての人が、ただキリストにあって歩むときに、教師となっており、また生徒となっているのです。

ところで、この新しい契約が、イスラエルとユダに対して与えられていますね。そうです、確かにイスラエルに対して新しい契約が与えられました。したがって、イエス様は福音の始めは、ユダヤ人に対するものでした。イスラエルの失われた羊を捜しにこられたのです。しかし、ユダヤ人がその指導者が、イエスをメシヤとして認めませんでした。その拒否によって、救いが異邦人に及びました。ぶどう園における例えにそのことが詳しく表されています。そして、使徒行伝に入りますと、果たしてそのことが起こりました。聖霊はエルサレムにいるユダヤ人信者たちに降りましたが、ついにカイサリヤにいるローマの百人隊長コルネリオに聖霊が降りました。この時に、使徒ペテロをはじめ、すでに異邦人に福音を伝えていたパウロなどと共に、神を求める異邦人にも差別なく神は救いを与えられることを悟ったのです。

それを使徒パウロは、奥義であると言いました。「この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。(エペソ 3:5-6)」前の時代には示されていなかったのですが、異邦人もキリストにあってこの新しい契約の約束に預かるのです。キリストの体によって、ユダヤ人も異邦人も一つとなっています。

けれども、イスラエル総体を神は忘れたわけではありません。神はイスラエルを決して見捨てておられません。それがローマ 11 章の主題です。異邦人の救いが完成したら、今度はイスラエルをみな救うと神は約束しておられます。その時についに、新しい契約が当初、約束していたイスラエル人に有効となるのです。なぜなら、彼ら自身がイエスを、約束のメシヤであると受け入れるからです。

3C 不義へのあわれみ 12

12 なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである。

完全な罪の赦しの宣言です。罪を赦すだけでなく「思い出さない」と主は言われます。これから学んでいきますが、私たちがとかく、過去の罪は赦されたが、現在や将来の罪については神の命令を守ることによって償われると考えます。その過ちを教会として犯したのがカトリックです。義認はキリストによって与えられるが、聖化は秘蹟と呼ばれる、カトリック教会の定めた儀式によって達成されると教えます。言い換えると、救いは信仰だが、救いの完成は行いによる、としたのです。しかし、ヘブル書での教えがその教理を粉碎します。ただ一度、この方はいっさいの罪を除き去ったのです。過去だけでなく、現在も、将来犯すかもしれない罪も、いっさいを神は取り除かれました。

「思い出さない」というのは、記憶からなくなることを意味しません。神は全知の方ですから、そこから記憶がなくなることはありません。神でなくても、人が過去犯した罪について、被害者がそれを忘れることではありません。忘れるのは敵意です。

それをよく表しているのが、ヨセフが兄たちにとった行動であります。父ヤコブが死んだ後に、兄たちがヨセフのところに来て、彼の前にひれ伏して言った。「私たちはあなたの奴隷です。」ヨセフは彼らに言った。「恐れることはありません。どうして、私が神の代わりでしょうか。あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたや、あなたがたの子どもたちを養いましょう。」こうして彼は彼らを慰め、優しく語りかけた。(創世 50:18-21) 兄たちは、ヨセフが敵意を表すのではないかと恐れていました。しかし、ヨセフはその悪いことを覚えていましたが、それは神がご計画なさったことだと確信していました。そして、彼らを慰め、優しく語りかけています。まるで彼らが自分に罪を犯さなかったかのようにみなし、振る舞っているのです。

4C 新しさ 13

13 神が新しい契約と言われたときには、初めのものを古いとされたのです。年を経て古びたものは、すぐに消えて行きます。

ヘブル書の著者は、ギリシヤ語において強い言葉を使い続けています。「新しい」というギリシヤ語には、時間的に新しいというのと、時間的にもそうだが質的に新しいという二つの意味が別々の単語で使われています。「新しい契約」の新しいは、後者です。そして、「古い」という言葉も同じように時間的に古いというのと、質的に古いという意味は別々の言葉が存在します。これも、質的に古いという意味で使われています。

ちょうどこれは、Windows8 で古いソフトを使えなくなった経験に似ています。これまでは Windows がバージョンアップしても仕えていたのですが、もはや bit が変わったために仕えなくなったのが多いです。質的に新しくなったので古いのが使えないのです。したがって、これが私たちの霊的歩みと似ています。つまり、新約時代に生きていながら、旧約の中に生きてるように生きていないでしょうか？ まだ赦されていない罪が存在するかのように生きていないでしょうか？ 自分の行ないを正してから、神に近づこうとしたりしていないでしょうか？ 地上のことだけを考えて、天のことをほとんど考えていないことはないでしょうか？ 私たちは、新しい契約の中に生きている者たちです。この喜びを知ることが、ヘブル書を学んでいく醍醐味です。